

■ 書 評



統合失調症の精神分析

中野幹三 著

金剛出版

2013年1月

224頁, 定価 4,410円

かなり以前、森本哲郎氏がウィーンについての著作を文藝春秋社から出版された。その中で19世紀末にウィーンにフロイトが出現したことと、ほぼ同時期に本邦において民俗学が勃興したこととは、深い関連があることを指摘されていたことを思い出す。

また、著者の同窓であり、知の巨人と言われた加藤周一氏が「20世紀の自画像」の中で、20世紀の学問と文学芸術の基本的原理に関する革命的变化は、生物学の領域を唯一の例外として、その最初の10年間に集中して起こった。1900年のプランクの量子仮説と1905年のアインシュタインの特殊相対性理論であり、もう1つとして1900年に発表されたフロイトの「夢判断 (Die Traumdeutung)」を挙げている。これほどまでにフロイトという人はすごい人なのかと驚いた記憶がある。

今回、中野幹三氏の著書を読ませていただいて、氏の教養の深さ、感受性の強さに圧倒された。最終章の冒頭で、「わが国には、民俗学という伝統的思考を粘り強く掘り起し、再生させる学問がある。民俗学者の折口信夫が明らかにした世界は、本質的な点において精神分析のメタサイコロジーときわめて近い。われわれは精神分析の理論を文化の深層において持っており、外来の思想と考えるべきではない」と述べておられる。卓見である。本書で著者が一番主張したい部分ではないかと愚考した。考察はご自身の臨床家としての集大成であり、精神分析学のあたらしい発展への出発という感じもする。

書評者は精神分析学に対しては全くの門外漢であるが、民俗学に関心があり、ユングの無意識や神話に対する著作に興味を覚えるものであり、フロイトと民俗学との関係だけに留まらず、ユングに関しての論考も今後は是非著わしてほしいと望むものである。よく言われているようにユングとフロイトの理論の相違は、家族背景の違いが関係しているようである。フロイトは美しい若い母親のかわいい最初の息子であったのに対して、ユングの方は野暮な母親、両価的な母親というイメージがあったようである。ユングは祖父を崇拜し同一化していたようである。同性を崇拜するか異性を崇拜するか、当然のことであるが、幼児期の体験が自身の理論において、極めて大きな影響を及ぼし、スタートは同じでも最終的には全く異なる方向へ発展することがしばしば起こるようである。「あとがきにかえて」は、精神科医として40年の経歴を持つ著者の人生の回顧である。秀逸である。母親に対しての感情は良好ではなさそうだが、姉上に対する感情が上質であり、父親に対する恐怖心が、フロイトの理論に著者を導いて行ったのではないかと考えた次第である。

アマテラス、スサノヲ、マナ、ケガレ、依代、まれびと、トーテムなどの語彙を若い精神科医はどれだけ理解しているだろうか。是非とも学んでほしいものである。

この作品は、単なる学問的収穫にとどまらず、私どもの日本人としてのアイデンティティーの確認に繋がり、精神科医としての大いなる栄養素となるに相違ない。

(木下利彦)